

## このひと



特定非営利活動法人キアセツ

わた なべ まもる  
**渡 邊 守さん**

## 自らの経験を踏まえつつ、 子ども支援に取り組む



### 聴かれなかった子どもの声

家庭での養育が困難な子どもたちは、社会が責任をもって養育する。その社会的養護が「より家庭的な環境を」という趣旨のもと、児童養護施設中心から里親制度やグループホーム形式への転換が進められている。しかし同時に里親のしんどさがぼつぼつと表面化してきた。「里親支援」という言葉が注目されるなか、「キアセツ」ディレクター、渡邊守さんは「成果につながる支援でなければ意味がない」と話す。その背景には自らの重い経験がある。

3人きょうだいの末っ子である渡邊さんが18歳になると、両親は里親を始めた。牧師の父と、父を献身的に支える母。そんな両親にとって里親は必然の社会貢献だったのかもしれない。「簡単なことじゃない」と反対した渡邊さんの危惧は現実となった。1人の少年が荒れに荒れたのだ。渡邊さんには子どもの気持ちが想像できたという。「両親は地域でも学校でも里親会でも“いい人”なんです。だから彼が問題行動を起こすと、みんなが説教する。誰も彼の声に耳を傾けなかったんです」

### ないがしろにされている「子ども」問題

すでに自立し、遠くから見守っていた渡邊さんが見かねて「おまえは何を望んでいるんだ?」と尋ねると、「1分1秒でも早くここから出て行きたい」という言葉が返ってきた。

困り果てた渡邊さんの背中を押したのが「あなたが里親になったら?」という妻の言葉だった。日本福祉大学を卒業後、サラリーマンになったものの、いつかは福祉にかかわる仕事をしたいと思っていた。30歳を区切りに退職し、夫婦でオースト

リアに留学した際に「日本で一番ないがしろにされているのは子どもの問題だと気がついた。特に社会的養護のもとで育つ子どもたちの代弁者が非常に少ない」と話す。中学生レベルだった英語に悪戦苦闘しながら児童福祉を学んだ。2006年、覚悟を決め、里親登録をして少年を迎えた。

### ひとりひとりに合わせた長期的支援を

その後、「日本の里親制度を変えたい」という思いから理事になったIFCO(国際フォスターケア機構)の世界大会で、コアアセットグループの代表と出会う。1994年にイギリスで設立された、子どものためのソーシャルケアをはじめとする事業を展開する企業である。渡邊さんの熱意に、日本での活動を物心両面でサポートすると約束してくれた。2010年、「NPO法人キアセツ」を設立。根底にあるのは「里親も児童相談所も一生懸命なのに子どもはハッピーじゃない。あんな悲劇はもう二度と見たくない」という思いだ。また、私たち一般市民も外野のままでもいいわけではない、子どもを社会で育てるのであれば私たちにも責任があるという信念だ。

「子どもひとりひとりに合わせた細やかで長期的な支援を提供して、子どもに安全な環境で健康に育まれる権利を保障する。それが私のいう“成果”です」と熱をこめて語る。「すべての人はかつて子どもでした。子どもを大切にしないということは人間を大切にしないということ。そんな社会であってははいけません。誰もが必要性を痛感していながら経済的にも人的にも資源の乏しい「子ども支援」への船出に胸をふくらませる。